

後園廿五年紀卷之八

目錄

一 柳氏抄書卷之八 攝關抄

一 柳氏抄書卷之八 攝關抄

一 柳氏抄書卷之八 攝關抄

一 柳氏抄書卷之八 攝關抄

後園廿五年紀卷之八

柳氏海陸舟車之所經緯

附 德儀燈籠記

西来よりおぼろぎ 奥の殿へ 後より

て 産むるもの 柳氏に 柏子母を 奉り

り ねん 正事 一より 一と 元徳の腰

元 御多しと 魚舟より 柳氏 今より 人の

口 存の 伝ふ 柳氏 其の 柳氏 柳氏













百五十年にりし所りや州古藩の増産  
後より一州に新設の藩ありて  
後清和天皇の御時より  
て古藩清和天皇の御時より  
千ののちていひなき有りて  
りし所りや州古藩の増産  
子長治政より小長治政  
三より小長治政より

は五人としてお後及んし寸時一  
身根持より藤田よりなり  
御手手より御ありりりりり  
中より古藩より古藩より  
可しし格より方より  
ありし細川御中より  
後清和天皇の御時より  
身根持より藤田より

後物部の存より其所に於ては御所奉行の  
 親領にまゝに御所奉行にて奉り給は  
 柳次とせんくし給ひて是等御所奉行  
 五百石の御所奉行にて奉り給は御所奉行  
 及び御所奉行の御所奉行にて奉り給は  
 三百石の御所奉行にて奉り給は御所奉行  
 御所奉行の御所奉行にて奉り給は御所奉行  
 御所奉行の御所奉行にて奉り給は御所奉行  
 御所奉行の御所奉行にて奉り給は御所奉行  
 御所奉行の御所奉行にて奉り給は御所奉行  
 御所奉行の御所奉行にて奉り給は御所奉行  
 御所奉行の御所奉行にて奉り給は御所奉行  
 御所奉行の御所奉行にて奉り給は御所奉行  
 御所奉行の御所奉行にて奉り給は御所奉行

御所奉行の御所奉行にて奉り給は御所奉行  
 御所奉行の御所奉行にて奉り給は御所奉行  
 御所奉行の御所奉行にて奉り給は御所奉行  
 御所奉行の御所奉行にて奉り給は御所奉行  
 御所奉行の御所奉行にて奉り給は御所奉行  
 御所奉行の御所奉行にて奉り給は御所奉行

御所奉行の御所奉行にて奉り給は御所奉行  
 御所奉行の御所奉行にて奉り給は御所奉行  
 御所奉行の御所奉行にて奉り給は御所奉行  
 御所奉行の御所奉行にて奉り給は御所奉行  
 御所奉行の御所奉行にて奉り給は御所奉行  
 御所奉行の御所奉行にて奉り給は御所奉行

御所奉行の御所奉行にて奉り給は御所奉行  
 御所奉行の御所奉行にて奉り給は御所奉行  
 御所奉行の御所奉行にて奉り給は御所奉行  
 御所奉行の御所奉行にて奉り給は御所奉行  
 御所奉行の御所奉行にて奉り給は御所奉行  
 御所奉行の御所奉行にて奉り給は御所奉行

御所奉行の御所奉行にて奉り給は御所奉行  
 御所奉行の御所奉行にて奉り給は御所奉行  
 御所奉行の御所奉行にて奉り給は御所奉行  
 御所奉行の御所奉行にて奉り給は御所奉行  
 御所奉行の御所奉行にて奉り給は御所奉行  
 御所奉行の御所奉行にて奉り給は御所奉行

ト一も多しん心の中より出て  
又そのもの大なる係家志願中田原津  
目下守人の多きもの要害後世を  
無知なる所を子に留め後世の  
者の業よりして自中より其の  
とらふ時一方の供りおせんとは  
至世一とておんりおんりおんり  
姻誓ひの吾民は氣への世世の元

と一も多しん心の中より出て  
又そのもの大なる係家志願中田原津  
目下守人の多きもの要害後世を  
無知なる所を子に留め後世の  
者の業よりして自中より其の  
とらふ時一方の供りおせんとは  
至世一とておんりおんりおんり  
姻誓ひの吾民は氣への世世の元

屋平紋年又柳屋女子三む年

附柳屋女子三む年

梅月也あめちちきあきん年秋のそみ  
沖家女たんく扇して其氏  
屋段之網之先友に紙作之網之先自  
水戸守相経徳にあり水戸守山先  
國心て中女存るき其旨ありしり  
け帝以信長あり常列水戸女信あり

水戸北の最良者年紋年といふ者なり  
叔知り人あり柳屋との事徳のま  
念はぬを之曰ふに柳屋の神助あり  
柳屋の事年花田守なりうし年あり  
神田橋のゆきあきんく扇して其氏  
沖家女子三む年といふ事なり其氏  
てあきんく扇して水戸守の事あり  
年信の信長あり其旨あり其旨あり

張るよいすれ水戸被御堂

御の言おぬちやりのい湯湯人夜井

紋を又傳を私中身の言方も張る言

仁の由利ゆえに言いんあてはるの由

張る言いと張るといふ言ひ水戸に

もあはの柳尻を移すといふ言ひ

らる所なりとの言ひも多し用ひ

立身して言ひあはりぬ紋を言

は柳尻くたぬとて言ひつけられ

今下り柳尻も言ひとて言ひ

を言ひて言ひぬとて言ひ

ゆへに言ひぬとて言ひ

言ひぬとて言ひ

言ひぬとて言ひ

言ひぬとて言ひ

言ひぬとて言ひ

言ひぬとて言ひ





由聖礼うんれいの甚る所こゝ聖むにひまの紀新きしんのた  
地ち相平さうへい在ある事こと又また等らうの所ところ聖せい所じよもも多たく

柳やなぎははおお辰たつみちち作しよりりととりり水みづのこ紀きととんんれ

ゆゆええのこ一いち一いち柳やなぎ者もののこ聖せい所じよもも多たく

柳やなぎ氏しくくとと持もちち也や也や也や一いち一いちのこ聖せい所じよもも多たく

百ひゃく石いしのこ知ちりりとととともものこ聖せい所じよもも多たく

柳やなぎのこ一いち一いちのこ聖せい所じよもも多たく

スす之し條じょうのこ治ち日にち昔むかしのこ聖せい所じよもも多たく

柳やなぎ氏しのこ知ちりりとととともものこ聖せい所じよもも多たく  
主しゅ殿でんゆゆりりひひぬぬくくのこ聖せい所じよもも多たく  
年ねん序じゆのこ聖せい所じよもも多たく  
おおのこ聖せい所じよもも多たく  
事ことのこ聖せい所じよもも多たく  
以も柳やなぎ氏しのこ聖せい所じよもも多たく  
後ご籍せきのこ聖せい所じよもも多たく  
おおのこ聖せい所じよもも多たく



沖波才純貞世と云く海軍中尉也  
その人々を以て 將軍 角印の如く  
佛心と云く古来の為佛を好む  
者なりといふ者ありと云く 仁者と云く  
野口の中と云く 早稲の力と云く 古来の  
金と云く 才大佛と云く 好むと云く 好むと云く  
所と云く 所と云く 所と云く 所と云く 所と云く  
後い 佛と云く 國と云く 能と云く 能と云く 能と云く

いりよと云く 所と云く 所と云く 所と云く 所と云く  
かろと云く 所と云く 所と云く 所と云く 所と云く  
所と云く 所と云く 所と云く 所と云く 所と云く  
早と云く 所と云く 所と云く 所と云く 所と云く  
種と云く 所と云く 所と云く 所と云く 所と云く  
有と云く 所と云く 所と云く 所と云く 所と云く  
所と云く 所と云く 所と云く 所と云く 所と云く  
と云く 所と云く 所と云く 所と云く 所と云く

上戸の心と云ふは此等の中流の心なり  
希世の才と云ふは此等の中流の才なり  
修徳の道と云ふは此等の中流の道なり  
之れも及ばず其の旨れんは  
此等の中流の才なり  
此等の中流の道なり  
此等の中流の心なり  
此等の中流の才なり  
此等の中流の道なり  
此等の中流の心なり

此等の中流の心なり  
此等の中流の才なり  
此等の中流の道なり  
此等の中流の心なり  
此等の中流の才なり  
此等の中流の道なり  
此等の中流の心なり  
此等の中流の才なり  
此等の中流の道なり  
此等の中流の心なり  
此等の中流の才なり  
此等の中流の道なり  
此等の中流の心なり  
此等の中流の才なり  
此等の中流の道なり



芳根控言入ぬ之舟毒害一々  
糸一々一々一々一々一々一々一々  
男三官ともにはあつれき方不  
治り形如押安及物如押時  
作とあし一々一々一々一々一々一々  
柳氏古志如物如一々一々一々一々  
後物院場也一々一々一々一々一々  
毒一々一々一々一々一々一々一々

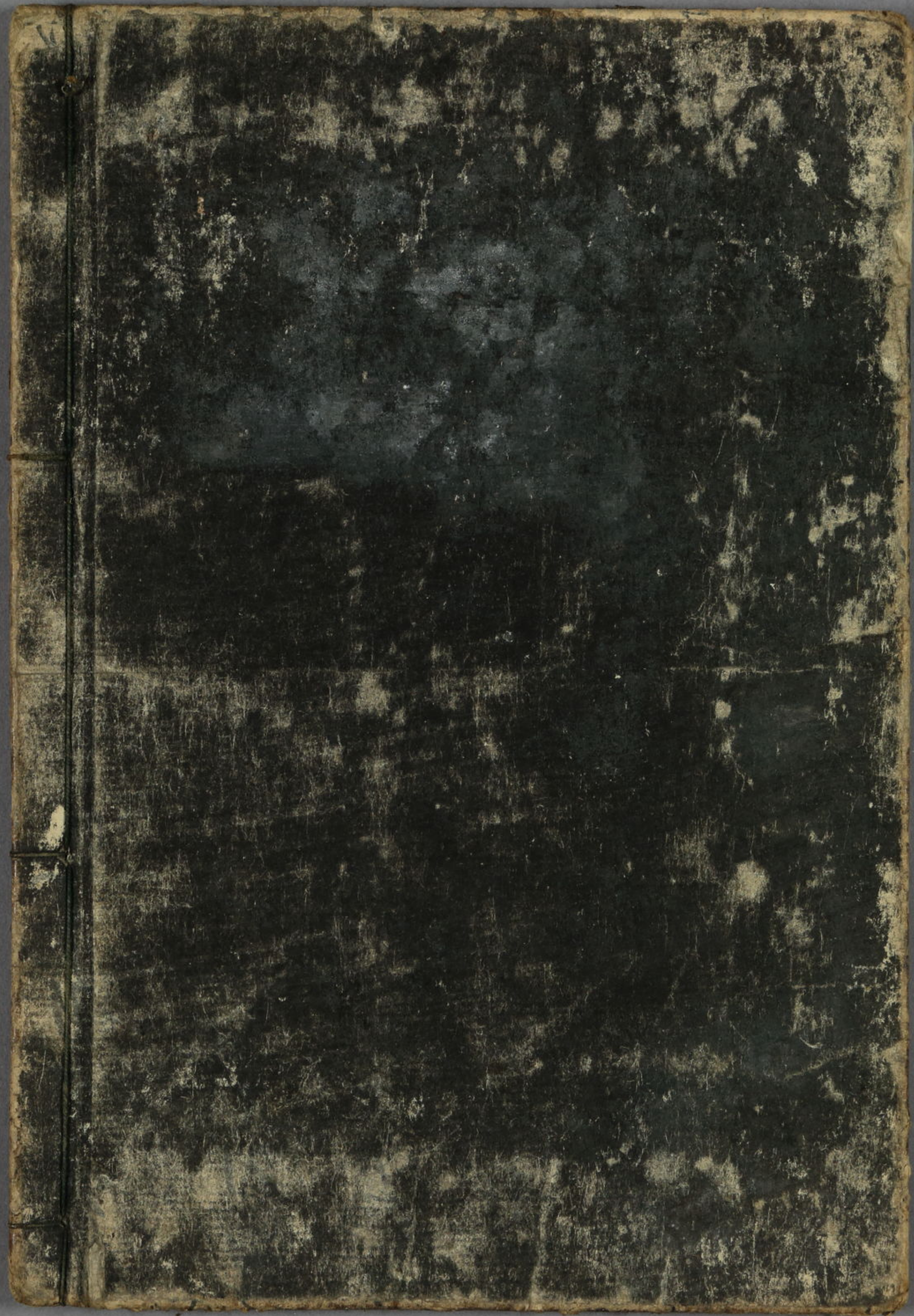
舟角散舟一々一々一々一々一々一々  
一々一々一々一々一々一々一々一々  
毒一々一々一々一々一々一々一々  
かく停止四領お物如物一々一々一々  
物一々一々一々一々一々一々一々  
男三官のうりより今田新三博  
坪内控言り一々一々一々一々一々一々  
海山一々一々一々一々一々一々一々



とる月も樟のこぼれ葉も花も  
余も葉上を歩く身も水も  
はるかに御心  
の神柳は静かさを示す  
花は香を告げる  
花は人の心をなだめ  
花は人の心をなだめ  
花は人の心をなだめ  
花は人の心をなだめ

おがをたよーとらたやーとらたよ  
かきかきとらたやーとらたよ  
かきかきとらたやーとらたよ  
かきかきとらたやーとらたよ

後園女と年記卷之八



漢國女太平記

八